鏡子

文／紙田 彰　絵／富永隆一　レイアウト／直江屋主人

鏡子が白樺林から出てきたときには、山の端に黄昏陽がかかっていた　隈笹がびっしりおいしげる道を過ぎたあたりで、虹色にきらめくひかりものに気づいたので、足早に近づいていくと、笹のするどい葉でさっとふくらはぎを切った　白い脚に赤い血が涙のようにしたたるエロティーク　ふっと叫んで指先でぬぐってみると銀粉がついていたので、きっと笹の花粉は銀色なのだわと考えながら、少女は北国の中で小人のようにうずくまった

翌日、同じ道を、こんどは笹の葉に気をつけながら歩いてゆくと、ひどくむずかしい数式が書かれた紫色の紙片をみつけた　鏡子は屈折率という単語とπという記号しかわからないのであるが、昨日切った傷口に残っていた銀色の粉は光のかけらなんだわと思った　とたんに気が軽くなって、いつものように若草のもだえという唄を口ずさんで向こうに行ってしまった　あとから聞くと、その唄はこんな文句だった

〈萌ゆる萌ゆる　草の実さん
いつからおまえはひとりもの
お嫁にいってあげようか
夜はあたしも恐いのだから

あるとき、肘掛椅子に坐っていると、窓の向こうにひかりものをみつけたので、サンダルをはいて外へ出てみた　霧のせいで、そのあたりには虹がふたつかかっていた　なんだか寂しい気配がするので、鏡子のお友だち！　と叫ぶと、向こうから、お友だちの鏡子！　という声がかえってきたので、あわてて肘掛椅子にもどってふるえていた　あとでよく考えてみると木霊のいたずらだと気づいた

裏側に水銀の塗布された、直径五センチメートルのガラスが空を映していた　そのうちに地球の芯のあたりから黒雲がわきだして、雨が降りはじめた　鏡子はいそいで雨除けをとなえてのぞきこむと、鏡の中の空はすっかり晴れていたのだが、水銀が酸化してどろどろ流れだしていたそっとぬぐってみると、赤い血糊が指先についた　けれども、その鏡には時間がつまっていたので、痛がって声を出す必要もなかった

少女が草苗を指のあいだで鳴らしていると、向こうにみえるひかりものから信号が送られてきた　そばまで近づいてみると、黄色い空気がただよっていた　胸をひろげて大きく息を吸いこんでいるうちにからだがぐにゃぐにゃしてきたので、苦しくなって気をうしなってしまった

レンガの壁があたたまってきたので妙に思ってうろうろしていると、鏡を吐きだしてしまった　びっくりしてのぞくと、鏡がくもっているのでタオルでふいてみた　すると、鏡子の顔が黄色く映ったので、話しかけると、知らないというので、黙っていなさいといった鏡がぴしっと割れて、黄色いガス状の光がとびだした

生理帯をあててていたが、鏡子は気配を感じたので、いそいでトイレに駈けこんだ　けれども、その直前に部屋中の光がかっとふくらみねばまったので、すでに孕んでいたああ、窓越しの微笑と若草のもだえ　五分くらいで臨月になったので力んでみると、鏡の球体を生んだ
その児を鏡子と名づけた